

LIVE: 狂乱 1994.2.2. 高円寺屋根裏II



photo by k.k.

前回の1月16日のライブでドラムがやめたとのことで、この日はドラム・マシーンを使っ
てのライブだった。それをきいたとき、すこし不安になったけれども、ライブがはじまっ
てまもなく、それはすっかり消えた。「すばらしい」という形容が陳腐に思えるくらいに
厳粛なステージ。ドラム・マシンのセッティングがあるからだろう、曲と曲の間が長い
のだけれど、間の抜けた間になることなく、ずうっと緊張感が維持されている。
何曲かやって、ステージの照明が消えた。しばらくして暗いなかから「糾追」のギター・
ソロがきこえてきた。時間の波をひきよせるようなギター・ソロがおわってステージに照
明が付き、「父よあなたは時代にやられた…」と歌がはじまった。1月16日にはじめて狂
乱のライブを聴いたときもそうだったけれど、この歌を聴くと心がひどくゆりうごかされ、
涙がにじんでくる。

糾追

父よあなたは時代にやられた五十年の壁の固さは承知
だから自分の幸せだけをただそれだけを考えてくれ
否定できないその口はあなたに一生つきまとう
無事だったらたのもしかったあなたは時代にやられたんだ
晩飯の時間にあなた部落差別について話した
否定できない口を開いて聞きたくなかった俺はとめた
あなたは一つの勉強だと言ったが感情もない知識にすぎない
差別の現場がこの地だったらあなたの言う悪人はあなただ
感じる事が大切だと思いますか
否定できないその口を開いたと同時にあなた
大変な偽善者と化す だから自分の幸せだけを考えてくれ
現実を理解できないなら否定できない口を開くな
つまらない知識やでためて偉そうな口を言うな
ではあなたたちの意見を聞こう
ではあなたたちの意見を聞こう



photo by k.k.

狂乱を産んだ親というものがあるとすれば、それは親の腹を喰い破って産まれてくるとい
う毒蛇のようなものであろう。「糾追」を聴いていてそう思った。毒蛇の腹を喰い破って
産まれてきたものはしかし狂乱の場合親と同じ毒蛇ではなく、毒そのものである。自ら
「存在を武器と成せ。存在自体が毒であれ」(「存在」と歌う、存在自体が毒である毒
そのものである。親である毒蛇の毒は人間を殺すが、狂乱は人間を清々しく崇高な存在に
生まれかわらせる毒である。

低いベースの音で「糾追」の扉がゆっくと静かに閉じられ、ヴォーカルのジュンが「あ
りがとう」と言って、ライブがおわった。静寂。

二月十九日 オールナイト
高円寺 屋根裏II
三月十七日
下北沢 エルター
三月二十九日
高円寺 屋根裏II
ドラム 募集
アルバム 二月下旬発売
狂乱 ジュン ボーカル
小嶋 改 ボーカル・ギター
英那 ボーカル・ベース
ナカニシ ドラム



この世は
自分ごと
環境情報

CD: THE COOL BEAUTY "THE COOL BEAUTY I"

銃で射つように。
手で切れるように。
毒を盛るように。
ロックンロールが凶器となって日常
生活を殺ることがある。
殺られたあとの非日常には夢見心地
の心地よさがある。
THE COOL BEAUTYは
日常生活を殺るにとどまらず、日常と
非日常の境界すら殺ってしまうおそろ
しい二重の凶器である。
ロックンロールが日常生活で何かの
足しになるとか、生きる意欲に何か開
保するとか、そんなことは一瞬で消え
て失せ、そのうえ、非日常の夢見心地
の心地よさも一切捨てて失せる。
THE COOL BEAUTYの
CD THE COOL BEAUTY
Iは OPEN THE DOOR
という曲ではじまっている。
ドアを開けると、そこに闇がひろ
がっている。光りかがやく闇。目を閉
じてはじめて見えてくるかがやく光。
光のなかに感じてる痛みの奥。そ
して聞こえてくるひび割れる寸前の
音と声。それは「おんがく」とか、
「うた」とか、いろいろなわらわらひびき
から、はるかに離れている。

ガラクタ
傷だらけの歪んだ声であやしく笑う
嵐の中で夢を見るような光をさがす
俺の大切なガラクタ
傷だらけの壊れた声であやしく笑う
俺の中で夢を見るような光をさがす
俺の大切なガラクタ
傷だらけの壊れた声であやしく笑う
嵐の中で夢を見るような光をさがす
俺の大切なガラクタ
俺の大切なガラクタ
(詞 富田浩章)

1月14日のライブも、2月5日のライブも(ともに新宿アンテナノック)地が
裂けるような、天をつきぬけるような激しいものだった。2月5日は「大山滋
人追悼ライブ」ということで通常のライブとは趣を異にしている、ヴォーカル
の人がまえにやっていたGENOAの曲とかもやったのだが(亡くなった大山滋人
が666というバンドにいたときよく一緒にライブをやったとのことで)、それ
も全部いまのTHE COOL BEAUTYの曲になっていて、そのうえに追悼の意味が重
くこめられていて、強く心に響いてきた。

LIVE: THE STREET BEATS 1994.1.30 横浜CLUB24
1994.2.1 新宿ロフト

OKIはDOLL2月号のインタビューで「以前だったらその年頃のリスナーとおなじ
視点でということ共感があったと思うんだけど、もうその視点から書いて
しょうがないし、嘘になるし、やっぱりそういうの、いつまでも歌うのって
嘘つきだと思ふよ」と言っているが、たしかにいまOKIは銃を射つようには歌
っていない。両手をさし上げて聴く者をつつみこむように歌っている。
1月30日のクラブ24のライブのあと、ライブハウスを出てきた男のファンが
「ヘラヘラした客ばかりで、気分がねえんだよ」とはきすてるように言って掃
っていった。OKIのラブソングは嫌いだと言う人もいる。いつも攻撃的であ
ってほしい。OKIの「怒りをぶつける姿」に触れて、自分たちも「怒り」を
罵りたいと思っているファンたち。しかし、OKIは「そういうのを歌うの
って嘘つきだと思ふよ」と言っているのだから、いまのOKIに「怒りをぶつける
姿」を求めてもそれはかなわないことになる。だから、いつまでも自分たちの
「怒り」にこだわっていたのならストリート・ビーツでは物足りなくなっ
てくるかもしれない。けれども、「怒りから悲しみ」へ、という人間のひとつの
変化、成長にいつまでも背を向けているのは「苦しんで大人になっていく」と
いう過程を受け入れないということである。トゲトゲとして、眼をとぼしたり、
ツバをはいたり、そこらのものをけとぼしたりすることだけが「怒り」ではな
い。「怒りをぶつける姿」を見せなくなったからといって、「怒り」がなくな
ったのではなく、「怒り」を「悲しみ」に喰い取らせることができるにな
ったのだ。それが、「苦しんで大人になっていく」ということなのである。
「悲しみ」のつきにはなにが来るのであろうか? それはこれからのOKIを聴
き続けていくことでわかるにちがいない。

2月1日のロフトのライブでOKIは「青の季節」を歌う前にこう言った。「映
画みたいな歌を書きたいと最近すごく思っています。その歌がひとつの映画
になるような歌を書きたい」と。男と女のある時間の経過を歌えば、それが映
画的だということはない。そこにドラマがなくてはならない。ドラマといっ
てもなにも「つくりごと」である必要はない。自分の体験から出たものでいい。
OKIの歌が説得力をもつのは、いつも自分の体験から得たものを歌っているか
らだし。しかし、その体験の濃淡をそのまま歌の濃淡にしてしまうと、歌が歌
にならない。歌の中にドラマが感じられず、印象が平板なのである。「ふーん」
とか「あっそう」で終わってしまう。SEIZIのギターがとてもしつから聴いて
いられるけれど、
いまのOKIが歌う「青の季節」には疑問を感じる。

WORDS: 音楽は言葉ではない、言葉は音楽なのだ
吉田加南子「音楽とは嵐がやむことではない、音楽は嵐なのだ」
(1988年、キーン「音楽のソラ」『音楽のソラ』)